

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** だけで、**4** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**45**分で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 解答はすべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 解答を直すときは、きれいに消してから、**新しい解答**を書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1 次の二つの文章を読み、後の問題に答えなさい。

文章1

生きていることは、人生と生活の二つの側面からとらえられる。ふつう、ひとはそのどちらか一方だけを考えて生きてはいけない。ところが、ときにこの両者のバランスがどうしようもないほど崩れることがある。どんな崩れ方をするかは、想像がつくだろう。人生が大きくなりすぎて生活が押しつぶされることは、あまり多くない。圧倒的に、生活が人生を押しつぶしかかるのである。目の前の生活への対応に忙しくて、人生を考える余裕を失ってしまうことが多い。

話が①鮮烈な印象をもたらしたのは、わたし自身が余裕を②失っていたからにちがいない。その天文愛好家の話を聞く会は、空気の澄んだ秋、紅葉の美しい山間の建物で行われた。

「みなさん、家路につくときに空を見上げることがあります。見上げてでも一銭の得にもなりませんよね。でも、あなたの頭上には、無数の美しい星が輝いているのです。少しの間、首をめぐらして空をご覧になってはいかがでしょうか。ころばないようにアスファルトの道路だけ見つめて歩くより、頭の上に輝いている美しいものを気に留めて歩いた方が、毎日が楽しくな

るとは思いませんか。」

彼はそう話を切り出した。アスファルトの道を見つめながら、あと何分で駅に着ける、家に着けると足早に急いでいたわたしだった。話を聞いた瞬間、わたしはとんでもなく損をしていたような気にさせられた。まわりの何ものにも目をくれず、足を早めて歩くことで、わたしは何を得てきたのだろう。話は続いた。

「毎日のように夜になると頭の上にある美しいもの、それを意識して生きると、無意識にもそういうものから目をそらして生きるのと、どちらが豊かでしょう。わたしは夜空を愛するようになって久しいのですが、そのことで物質的に得したことは何もありません。でも、わたしはやっぱり空を見、望遠鏡をのぞきたいと思っています。」

宇宙の神秘に向かい合っている彼の幸せを思った。星だけではない、月も、花も、鳥も、夕焼けも、雲も……、目に入ってくるいろいろな美しいものを、わたしは本当の意味で見えてはいなかったような気がした。

それから程なくしてのことである。わたしは自分の一日を俳句で記録することを思いついた。一日に三句の俳句をつくることにしたが、これは意外に大変であった。大変なわりに、俳句はほとんど上達しなかった。それでも、わたしが一年あまり俳句づくりをやめなかったのには理由がある。俳句をつくるようになって

て、わたしは、自分のまわりにあった季節を彩るものを意識できるようになっていった。今まで見過ごしにしてきた季節季節の風物などに目を向けることを、大切なことだと感じるようになっていた。星を愛する彼の話の影響であった。アスファルトのわきにある草花、木々のようす、樹間を飛ぶ鳥、虫の営み、そういうものに目を向けることの豊かさが少しわかったように思った。電車の中でも、疲れて見える人の顔をながめ、自分も同じような顔をしているのだろうと想像したり、その日のスケジュールを頭のなかに入れることに終始していた貧しい日常が、少しずつ変化していった。車窓の枯田がみるみる青く変化していくさまに驚いたり、沿線の家々の庭に咲く花が桃なのか梅なのかなどと考えたり、線路のわきに咲く水仙や菜の花に目を奪われたりした。

名を知らぬ花を名を知らぬままに美しいと思ったりもしたが、言葉の働きは玄妙なのだった。「山笑ふ」という季語がある。明るい春山のたたずまいを形容した季語である。冬の山の場合は「山眠る」という。「山笑ふ」という言葉を知り、薄く緑がかつてくる山を見ていると、かたい眠りに閉ざされていた山がようやくやく眠りから覚め、微笑んでいるように見えてくるから不思議であった。

(村上慎一「なぜ国語を学ぶのか」による)

○言葉の説明

- ① 鮮烈 ―― あざやかではっきりしているようす。
 ② 失して ―― なくして。
 ③ 玄妙 ―― 奥深く味わいがあること。
 ④ 形容 ―― 物事のようにすや性質などを、言葉で言い表すこと。

文章2

みなが寝静まったころノートをひっぱり出して、ころゆくまで書くのは日課になった。思うぞんぶん吐き出して、ふう、と満足のため息をつくころは夜もすっかり更けて午前二時、三時というのはザラで、気がつくとき夜が白々明けはじめていることもある。

心ゆくまで吐き出すには言葉を溢れるほど使わねばならず、一晩でノート一冊書いてしまうこともあったが、満足できても、これじゃ体がもたない。眠いのと書きたい気持ちとの板挟みで困った。

そんなときである。国語の授業で「詩」に目がとまったのは。

(へえ、こんな詩がある。こんな書き方があるのだ) 目がぱちぱちするほど感動したのは、萩原朔太郎の「竹」という詩だった。

竹

光る地面に竹が生え、

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

根がしだいに^②ほそらみ、

根の先より^③繊毛が生え、

かすかに^④けふる繊毛が生え、

かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、

まっしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

生え、生え、生え……おわりなく畳みかける言葉が
つきかさなり、圧倒されるように竹が浮かびあがって
くるではないか。それも、こんなに少ない字数で。
言葉たちも、誇りを持っていて感じた。(この場を
占めるのはオレしかないぞ)とでもいうふうには、名
詞や形容詞や助詞のひとつひとつが、凛と坐っている。

(私のノートの中の言葉が、ついでのように放り出
されているのと大違いだ)

しかも余白がたくさんある。真っ白な皿に配置ひとつ
おろそかにせず、大切に置かれた果物みたいだ。

(まるで、文字で描いた絵のようではないか)

そこで、「詩」というものを自分も書いてみたいと思
いはじめた。

(工藤直子「こころはナニで出来ている？」による)

○ 言葉の説明

- ① 板挟みいたばき —— 二つの間に立って、どちらにもつくことができず苦しむこと。
- ② ほそらみ —— 細くなること。
- ③ 織毛せんもう —— 細く短い毛。
- ④ けぶる —— ぼうっと薄くうすかすんで見えること。
- ⑤ 凜とりん —— ひきしまったようす。

〔問題1〕

文章1と文章2の筆者は、自らの経験をとおして、どのような言葉の働きに気づきましたか。文章1と文章2の両方に言えることをまとめ、二十字以上、四十字以内で書きなさい。なお、最初のます目から書き始めなさい。「、」や「。」もそれぞれ字数に数えます。

〔問題2〕

〔問題1〕でまとめたことについて、あなた自身が見聞きしたことや体験したこと、例を挙げながら、あなたの考えを書きなさい。なお、内容のまとまりやつながりを考えて段落だんらくに分け、四百六十字以上、五百字以内で書きなさい。また、次の「きまり」に従いなさい。

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 「、」や「。」もそれぞれ字数に数えます。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えませんが、

